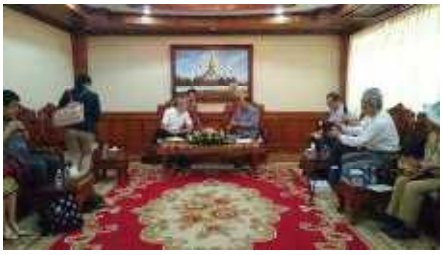
日本ＡＡＬＡ企画
「ラオス平和の旅」に参加しました

ＴＯＺＳＵＮ

私の所属している「アジア・アフリカ・ラテンアメリカ連帯委員会、略してＡＡＬＡ）が全国的に推進している署名「東アジア諸国首脳　各位　**戦争するな！　どの国も**　東アジアを不戦、平和、協力、繁栄の共同体に」の個人署名が２４，０００筆、団体署名が５００筆集まりました。その半分を持参して、ＡＳＥＡＮ共同体（２０１５年１２月発足）の議長国ラオスの平和連帯委員会を訪れ、カンパン会長に渡して会談を行いました。将来、平和な東アジア共同体が作れるようにという要請です。快く受け取っていただけました。



次に是非お伝えしたいのは、ベトナム戦争当時、アメリカ軍によって無差別に大量のクラスター爆弾がラオスに投下されたことです。上にある大きなケースが割れて小型の不発弾が雨の様に降ってきたそうです。それが、戦後事後処理もせずアメリカ軍は逃げ帰りました。ラオスを秘密裏に攻撃していたので、秘密のままにしたのでしょう。その後、あちこちでこの爆弾が爆発し、手足を失う人々・子どもが続出しています。現在も田舎や山村では事故が続いています。

ラオスでは、「コープ・ビジターセンター（ＣＯＰＥ）」を中心に義足や治療、爆弾の撤去活動を続けているとのことです。ここの職員とも交流をしました。

３泊したヴィエンチャン（首都）では、寺院「ワット・シーサケート」や「ワット・ホーパケオ」を見学しました。ラオスは６５％以上が仏教徒で、ラーオ族（多数民族）は昔から精霊信仰でしたので、自然と人間にとって「心優しい国」だと思いました。

フランス植民地時代の名残かパトゥーサイという凱旋門がパリの凱旋門を模して作られていました。過去のあらゆる闘い（国王時代の戦い、フランスとの戦い、アメリカとの戦い、１９７５年に現在の政府が出来るまでの内乱など）の末に勝ち取った凱旋門として、ラオス国中から観光客が来ていました。なお、日本軍だけは、ビルマやマレーシアに進出するために、

フランス軍を追い出し、ラオス自身の政府をつくらせ、先を急いだせいか、ラオスを応援した形になったようで、日本人に対して、友好的な感情を持っているようでした。

「タート・ルアン」というラオス王国時代の仏塔やラオス人民革命党の「ラオス人民軍歴史博物館」や「ラオス国立博物館」を見学することで、膨大な苦難の歴史を知ることが出来ました。

その見学後、大きな縫いぐるみを売っている出店に遭遇しました。聞いてみると、９月は卒業のシーズンで、ラオスでは大人にもピカチューなどの縫いぐるみや花飾りを贈ると言うことでした。

このあとお土産を買うために、「タラート・サオ」という市民最大の市場に顔を出しました。ツアーの皆さんと同じく、ドライ果実とラオス・コーヒー豆（練乳や砂糖を入れて甘くして飲む）を購入しました。私は、女性の来ている「シン」という巻きスカートの色彩と絵柄にすっかり気に入ってしまったので、妻と娘に１００万キープという高額を出して購入してしまいました。旅の説明会でお土産は１万円を現地でキープに両替すれば十分ですよと言われていましたが、オーバーしてしまいました。さらに、ＶＩＳＡカードがラオスＡＴＭでは接触不良で使えず、添乗員さんや友人に５０ドル借金することになりました。こんなにドルが使えるのならば、３００ドルぐらい持って行けば良かったと反省しています。ドルからキープへの両替店はたくさんありましたから。なお、この時点でのレートは１００円＝１ドル＝８０００キープでした。

残りの３日間は、世界遺産で観光客が急増している古都ルアンパバーンに宿泊して、ツアーを楽しみました。プシーの丘から見下ろした古都は、緑に覆われた南国の町並みでした。

この町は、ラーンサーン王国時代の首都だったので、１５６０年ごろに建立された寺院「ワット・シェントーン」を中心に、日本で言

う寺町通りがありました。見学した寺院は、他に「ワット・セーン」「ワット・マイ」です。どの寺院も金色の装飾がなされており、仏教への寄進と帰依の深さを感じることが出来ました。

寺院の中に入るときは、裸足（靴下は可）と聞いていたので、皆さんサンダルを用意していました。また、半ズボンの女性は、入り口でレンタル巻きスカートを借りて、お参りしていましたが、急に雰囲気が素敵になったのはどうしたことでしょう。やはり、この国の「シン」は美しいですね。個人的な意見ですが、ベトナムのアオザイより良いと思います。

このルアンパバーンのメコン川クルーズで、1時間半上流の「パークウー洞窟」の中の４０００体もあるという仏像を見に行きました。メコン川は、上流と言うこともあり、土の溶け出した茶色の色の川でしたが、波もほとんど無く、エンジン音をとどろかす細長い船へ心地よい風が川面から吹き込んできて、至極の時間でした。この船は後ろにトイレも付いている面白い船でした。ラオス南部のパークセーの付近の滝によって交通が遮断されるため、大型船は入ってこれないようです。

このクルーズの際に、酒造りで有名なバーンサーンハイという村に行きました。ここで米の焼酎「ラオ・ラーオ」を大きなドラム缶で蒸留している場面を見て、こんなに簡単に作れるのかとビックリしました。昔の日本でもこうやって密造酒を造っていたことでしょう。アルコール度４５度の焼酎を口に含むと、口の中がカーと燃え上がるのを感じました。このあと、ミネラルウォーターで３倍に薄めると、普通の焼酎になりました。

最終日には、オプションツアーと言うことで、「クアンシーの滝

とモン族の村の訪問」に参加しました。「クアンシーの滝」は、水量が多く、手前の橋の上に立つとオゾンの霧が体一杯に降り注ぎます。あまり長くたっているとびしょ濡れになるので、ほどほどにしましたが、ヨーロッパやアメリカの娘たちはビキニ姿で滝の中に入り楽しんでいました。さすが自由奔放な国の人々ですね。アジア系の人は誰も真似していませんでした。

続いて「モン族の村」に行きました。ガイドブックに載っているモン族の娘の綺麗な衣装を拝見するつもりでしたが、どちらかというと、ベトナム戦争以降の後遺症（モン族の一部がアメリカ軍に協力したので、ベトナム軍やラオス軍により掃討され、その多くが限られた村に押し込められている）の村のようでした。綺麗な衣装はありませんでしたが、さすがに刺繍は素晴らしかったので、「1ドル」の刺繍入りのショルダーバッグを3個購入しました。シンも購入したかったのですが、こづかいが無くなりましたので、諦めました。

このあと、ルアンパバーンの飛行場からハノイを経由して成田に早朝に帰ってきました。全員ケガも無く、食中毒も無く、楽しく勉強になる旅行を終えることが出来ました。この旅を企画した日本ＡＬＡと富士国際旅行社に感謝で一杯です。「富士国際旅行社」は、右翼系新聞のでっち上げ攻撃にさらされていますが、負けず頑張って下さい。応援しています。